

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

小さな島の大きな挑戦

受賞者 **特定非営利活動法人
おぢかアイランドツーリズム協会**
ながさきけんきたまつうらぐんおぢかちよう
(長崎県北松浦郡小値賀町)

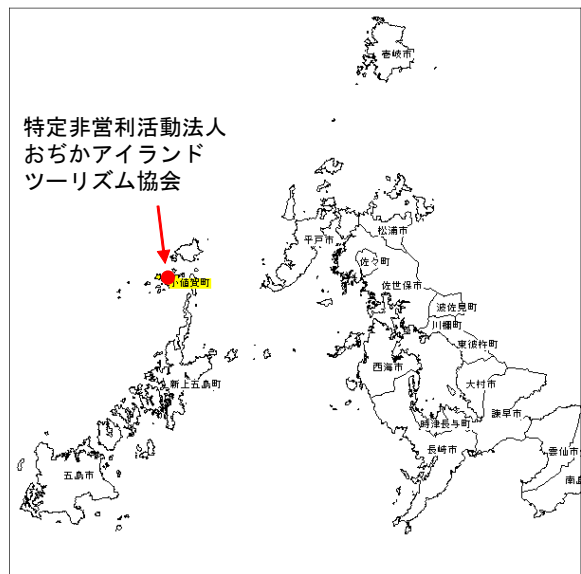
■ 地域の沿革と概要

小値賀町は、長崎県西部の五島列島の北端に位置し、小値賀本島を中心として、その周囲に散在する大小17の島からなっている。本土からの交通手段は海路のみで、佐世保港からフェリーで約3時間、高速船で1時間40分の距離に位置している。

町の面積は25.46km²で、ほぼ全域がさいかい西海国立公園に指定されている。

町の主な産業は農業・漁業であるが、近年は高齢化、担い手不足等により厳しい状況に置かれている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. むらづくりの動機・背景

(1) 地域内での検討

小値賀町では過疎、高齢化、少子化、一次産業の低迷など多くの課題を抱えていた。

そうした現状を打開するため、平成10年度から交流人口の増加と自然体験の充実を目指して自然体験活動と環境教育の取組を開始し、平成13年度には、行政と地域住民が参画した「ながさき・島の自然学校」を組織化した。

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	市町村
地区の性格	機能的集団
農家率 (内訳)	24.3%
	総世帯数 1,337戸
	総農家数 325戸
専業別農家数 (内訳)	213戸
	専業農家 92戸
	1種兼農家 31戸
	2種兼農家 90戸
農用地の状況 (内訳)	耕地計 552ha
	田 184ha
	畑 361ha
	樹園地 1ha
	牧草地 6ha
	耕地率 21.7%
	農家一戸当たり耕地面積 1.7ha

平成13年から現在まで、宿泊型体験事業『子ども自然王国～宝島』が春休み、夏休みごとに開催されており、「島民が先生」をモットーに島民が中心となって企画、運営を行い、地元の商店主や農・漁業者がインストラクターとなったシーカヤックやトレッキング、郷土料理作り、わらじ作り、農業体験、漁業体験などの体験プログラムが実施されている。



写真 1 田植え体験の様子

(2) 地域協議会(窓口組織)の立ち上げ

活動を続ける中で、①事業が体験プログラムごとに設定されており、統一性がない、②各事業に関わる住民がまだ少数で偏りがある、③交流人口増大対策が取られているが、その受け皿(民泊)作りが進んでいない、④交流活動が基幹産業である農漁業の活性化に結びついていないという問題点が出てきたため、これらを解決することを目的として行政と民間、住民が連携して研究会を発足した。

その後、年間を通じた観光客誘致につなげるために、平成17年11月にグリーン・ツーリズム等を推進する任意団体として「小値賀町アイランドツーリズム協議会」を設立し、行政、観光協会、民間が一体となった推進体制が立ち上がった。同年には、7軒が体験民宿開業許可を取得して民泊モニターツアーの受入れを行い、民泊が本格的にスタートした。

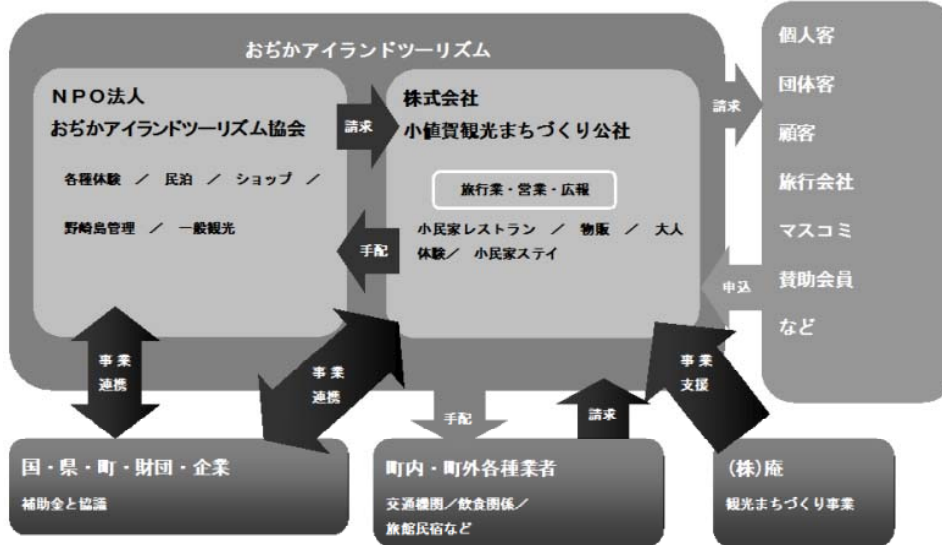
そして、平成19年に「小値賀町アイランドツーリズム協議会」を母体として「小値賀町観光協会」「ながさき・島の自然学校」の3団体を統合した「NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会」(以下「協会」という。)を設立し、組織力を強化しながら受入れ体制の充実を図っている。

2. むらづくりの推進体制

(1) 組織体制、構成員の状況

平成24年3月末現在、協会の組織体制は会員85名、役員7名、職員8名となっており、職員が総務部、島の自然学校、野崎島、民泊部会、観光協会を担当している。

第2図 むらづくり推進体制図



(2) 会員の拡大に向けた取組

「小値賀町の町おこしのために」をモットーに行政、農協、漁協などと一緒に民泊組織を立ち上げ、町づくりのリーダーやその周りの人たちに呼びかけることで受入会員を集めるとともに、事業を活用した先進地視察やモニターツアーによって民泊経験を積み重ねていった。

民泊の実績を作る中で、島外の人や子どもとの交流が楽しいことや民泊が収入につながることに多くの住民が実感できたため、協会の会員となる民泊の件数が増加している。

(3) 他の組織、団体及び行政との関係

ア おぢかアイランドツーリズムの形成

協会は、民泊や野崎島にある廃校舎を利用した宿泊施設「野崎島自然学塾村」での体験などにより、修学旅行生など子どもの団体客を中心に受入れを行っていた。

その中で、近年では小値賀町での取組に注目が集まり、民泊と昔ながらの旅館・民宿だけでは難しい大人の受入れに対応する必要が生じてきたが、NPO法人では仕組みの上で限界があった。そのため、大人の期待に応えるサービスを創出し、新しい顧客層を拡大することを目的に、平成21年、「株式会社小値賀観光まちづくり公社」（以下「公社」という。）が設立された。

また、地域に根ざした協会と公社が両輪となって「おぢかアイランドツーリズム」を形成し、小値賀観光のワンストップ窓口としての役割を果たしている。

イ 地域との連携

当初7軒から始まった民泊については、現在は35軒に拡大している。
また、町民の約30人に1人が当法人の会員、40世帯に1世帯が民泊民家となっており、島を挙げての協力体制となっている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 地域資源を活用した体験型観光と民泊事業の確立

豊かな自然の中で地域の「もの」、「人」、「歴史」などを通じた体験を実施し、「まるごと、ありのままの小値賀でのおもてなし」を実現している。さらに、関西、関東からの旅行を中心に毎年多くの人々が来町しており、民泊や各種体験が好評を得ている。

特に子供向けプログラムである「島らいふ」「宝島キャンプ」については、平成13年に「野崎島」での自然体験キャンプを開催してから毎年続いており、これまでに全国から延べ1,000人近くが参加している。

また、地域づくりにおけるビジネスモデルとして、収益をあげ、自立的かつ継続的な観光を活かしたまちづくりを実践している。

(2) 地域への貢献、雇用の拡大

「おぢかアイランドツーリズム」の取組がマスコミ等で取り上げられるようになり、民泊はもとより旅館・民宿の宿泊者も増加している。

また、当協会の事業収入が1億円を超え、地元商店、民泊・体験インストラクターへの支払い等によって地元経済に大きく貢献している。民泊受入世帯にとって、民泊での収入は本業を上回るものではないものの、貴重な副収入になっており、民泊や体験事業に協力する動機となっている。協会においても、職員数が発足当時の6名から8名に増加しており、雇用拡大に結びついている。

さらに、民泊の開業や体験インストラクターの養成などの地域資源を活用した取組は地域住民の生きがいにもなっており、小値賀町全体の活性化に大きく貢献している。

(3) 「おぢかアイランドツーリズム」によるオリジナル性、先駆的な活動

協会及び公社が形成する「おぢかアイランドツーリズム」は、小値賀町観光のワンストップ窓口として観光相談や来島の受付を行うとともに、島民がインストラクターとなって提案する様々な体験プログラムを組み合わせたオリジナル滞在プランを作成している。

また、自然体験などを活用した企業研修、教育旅行、野外活動研修など、人と文化と自然との共生を目指して活動を展開しており、子供から大人まであらゆる顧客をターゲットとした取組を行っている。

このように、交通アクセスで不利な離島という条件を逆手に取り、ここでしかできない自然体験と地域密着型の文化体験を通し、多種多様で質の高いプログラムを実施している。

(4) 今後の展開と継続性

協会は、公社と一体となった事業展開により、大人層をターゲットとした滞在型の島暮らし体験交流事業を行っている。古民家レストランや古民家宿泊施設の整備により、今までの宿泊施設では対応できなかった大人の個人客をターゲットにした取組が注目を集めており、新たな滞在型の体験メニューを充実させ、交流人口の拡大につなげている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 民泊受入農家、漁家の所得向上

小値賀町では、「島のくらし丸ごと体験」をテーマとした民泊が行われ、民泊を受け入れている農家や漁家では宿泊者への食材提供のために釣りや野菜の収穫を行っている。当初は7軒だった民泊先は35軒に増加し、平成22年度の民泊と体験による収入は民泊全体で約1,400万円となっている。

農家や漁家が本業を活かしながら、ある程度副収入が得られることで、第1次産業を支えることへも貢献している。

(2) 子ども農山漁村交流プロジェクトの取組

協会では、平成20年度から農林水産省、総務省及び文部科学省の3省連携による「子ども農山漁村交流プロジェクト」によって、他地域の小中学生を平成20年度は6校222人、平成21年度は5校229人を受け入れている。

民泊での体験は、参加した子どもにとって貴重なものであり、最初は不安な様子の子どもでも体験



写真2 民泊の様子

活動を行ったり夕食を一緒に作ったりする中で次第に打ち解け、フェリーターミナルで民泊先の方と別れる際には涙する光景が見られる。

(3) 農業の担い手の確保（Iターン、Uターン者の増加）

1次産業の担い手が減少する中、農業者の育成等を行う小値賀町担い手公社の研修生は、ほとんどがIターン、Uターン者となっている。その中の1組の夫婦は、民泊で訪れた小値賀町の自然や暮らし、島民一人一人の

おもてなしのこころに触れることにより、小値賀に住んで農業をやろうと決意して三重県から移住した。その後2年間の研修を受け、現在では施設園芸農家として小値賀の地に深く根付いている。

このように民泊の取組から小値賀の魅力を実感することで、少しずつIターン、Uターン者が増えている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 都市との交流による交流人口の増加

小値賀町における民泊の実績については、平成19年度の1,165人（延べ人数）から平成22年度は2,345人（延べ人数）と順調に伸びている。

また、当初は民泊を推進することで、既存の旅館や民宿の経営が圧迫されるのではという危惧もあったが、「協会」の取組がマスコミ等で取り上げられるようになり、旅館と民宿の宿泊者も平成18年の8,142人から平成22年の10,646人に増加している。

また、「野崎島自然学塾村」では、宿泊と自然体験を組み合わせた旅プランの提供などを行いながら新規顧客の開拓を進めている。

さらに、公社で行っている古民家を利用したレストランや宿泊も好評を得ており、新しい顧客の獲得につながっている。



写真3 古民家を利用したレストラン

(2) 生活文化の伝承

地元住民をはじめとする関係者の協力の下、民泊、農業・漁業などの生活文化体験、シーカヤック・トレッキングなどの自然体験等の多岐にわたるプログラムを実施している。実践者自らが今まで培ってきた生活体験を見つめ直し、体系化していった。体験プログラムの実施により、小値賀町を訪れた都市住民はもとより、地域住民における生活文化の伝承へつながっている。

(3) 自然環境の保全や島の魅力の再発見

小値賀町では、豊かな風土を活用した自然体験やエコツアーが行われ、小値賀島や周辺の島々を訪れる人々を魅了している。現在では無人島と化した野崎島にある「旧野首教会」は、「長崎のキリスト教関連遺産」として世界遺産暫定リスト入りするなど、世界に誇る遺産などが残っている。

太古の昔から人々が築いてきた歴史や風土を現代の島民も大切にし、次の世代へ残す活動も積極的に実施している。